

目次

第一章 順風満帆ではなかった音楽人生——その光と影

9

出会いは二〇一八年の夏／原点の場所／ビートルズに憧れた学生時代／私の小さな人生／僕はふるさとを捨てた／苦い思い出となったデビュー／大ヒット「心の旅」の裏側／東京にも思い出の場所が／あの名曲も作曲／順風満帆な音楽人生に見えたが……／初めて明かす闘病生活／がんを乗り越え、挑んだりベンジツアー／特別な思いを抱くコンサートも／「もうできなくなってもいいかな」

第二章 ふるさとでの出会い——気づいたことばの力

57

「福岡の空を見たい、風を感じたい」／雑談から始まった作詞講座／出会ったのは同世代の人生／共感の渦が巻き起こったある女性の詞／ことばにすることば「前を向きたい」／

7

自分を変えるつもりでペンと紙を持ちなさい／財津のある気づき

第三章 新たな挑戦——一〇年ぶりの新曲作り——

一〇年ぶりの新曲——音楽人生初めての挑戦／
新曲作りの背景にあったッつながりを求める〴〵行為／
メロディでなく、詞を先に／新曲にかける思いの強さ／
導き出された魔法のことば／悩んでいたフレーズも／
悩みつつ臨んだレコーディング

第四章 コロナ禍で見つけた光——新たな指針に——

新型コロナの余波／半年ぶりの財津にある変化が／そんなところまで消毒!?!／
不安をぬぐえたきっかけ／新しいチャレンジをしたい／
「チャットって何ですか?」／コロナ禍だからこそ歌う?

第五章 詞を書くことで「生まれ変わる」

作詞講座を再開／立ちあがるヒントを求めて／コロナ禍で苦しむ人は他にも／
コロナ禍に詞を書くことの意味／ふたたび挑み始めた新曲作り／
奥口さん、一歩前へ／紡ぎ出されたことばの力／「生まれ変わる」／
作品として受けとめる／この歌を届けたい／人生はひとつ でも一度じゃない

119

第六章 「人生はひとつ でも一度じゃない」に込めた思い

「明らかに緊張しています」／歌い終えた後に出てきた意外なことば／
「自分に戻ってきた」／新曲に込めた思いは他にも／粗品だけ受け取って／
タイトル決定の裏エピソードも／「あとひと仕事、ふた仕事」／
本当にリベンジした／「歌を歌って生きて行きたい」

147

まえがき

忘れられない財津さんの姿がある。がんからの復活コンサートに臨む様子をこの目に焼き付けたいと私たちが取材に入ると、そこには緊張して不安に駆られながらも、すべてのスタッフにあいさつをする財津さんがいた。財津さんはすぐに私たちのところへやってきて、声をかけてくれた。ふつうであれば他人に構っているような余裕がないなかでも、気遣いを忘れない。アーティストとしてではなく、ひとりの人間としての財津さんの器の大きさを垣間見た瞬間だった。

昭和から令和の音楽シーンを牽引してきた財津和夫というひとりのアーティスト。団塊の世代の方々にとっては語り尽くせないほどの思い出があるだろう。しかし、三〇代の私の周りでは「最近あまり見かけないね」「どんな曲の人だっけ」という声ばかり。同じ福岡出身の私はいつか財津さんを取材し、若い世代にもちゃんと彼の魅力を知ってほしいと考えていた。でも、どうやって、どんな切り口で取材すればいいのだろうかともやもやし

ていると、驚きのニュースが入ってきた。全国ツアー中に大腸がんが判明し、闘病生活に入ったというのだ。そのときから、おこがましいかもしれないが、私が財津さんのことを記録し、多くの人に伝えなければいけないと思うようになった。

NHKには、過去の番組を見られるアーカイブシステムがある。それを調べると、ここ一〇年近く、財津さんを正面から取材した番組はないことがわかった。切り口やタイミングは関係ない。いま、財津さんが思っていること、感じていること、そしてどう次のステージに向かっていくか、記録しなければいけない。そこから私たちの取材が始まった。

取材では多くのファンや財津さんと同世代の方々にもお会いすることがあった。その過程で、「若いくせに何で取材しているの?」「財津さんの魅力ちゃんとわかっている?」と言われたこともあった。しかし、全盛期を知らない私のような若造だからこそ、財津さんのいまの姿にしつかりと向き合えるはずだと、信じながら取材を続けてきた。

足掛け四年にわたる私たちの取材は、二〇二一年二月に「ザ・ヒューマン 人生はひとつでも一度じゃない」財津和夫」として放送されたが、番組では伝えきれなかった財津さんの一挙手一投足、そして私が感じた財津さんの人間的な魅力をこれからお伝えする。

第一章

順風満帆ではなかった音楽人生——その光と影

出会は二〇一八年の夏

二〇一八年夏、都内のリハーサルスタジオ――。

八月下旬ということもあって、気温はとつくに三五度を超えている。私とカメラマン、そして音声マンの三人はとめどもなく流れる額の汗をぬぐいながら、黙々と撮影の準備に取りかかっていた。

ただ、いまから思えば、汗は暑さのせいだけではなかったのかもしれない。

財津に大腸がんが発覚したのは二〇一七年のこと。治療に専念するため、財津はTULIP結成四五周年コンサートツアーを中止にするほかなかった。

それから約一年。体調が回復したこともあって、TULIPがツアーを開催するという知らせが飛びこんできた。

私はNHKでディレクターとしてドキュメンタリー番組を制作している。

がんから生還し、ふたたびコンサートにチャレンジする財津の姿を追ってみたい――。そう閃いた私はさっそく、財津の所属事務所に番組出演をオファーし、承諾を得た。そ

の取材がいよいよこの日からスタートするのだ。しかも財津とはこれが初対面となる。当時の私はまだ三〇歳を迎えたばかりだった。こんな若造が取材にやってきたと知り、財津はがっかりしないだろうか？ そんな不安感が、私にさらに汗をかかせていたのだと思う。スタジオ内は、ピンと緊張の糸が張りつめていた。無理もない。一年三ヵ月ぶりのTULIP再始動なのだ。スタッフも緊張しているのだろう。

「こちらです」

スタッフに指示された控室に入ると、私たちがあいさつするより先に立ちあがった男性がいた。すらりとした立ち姿。財津だった。

「このたびはご丁寧にお越しいただき、本当にありがとうございます」

いきなりお礼のことばを聞かされ、私はうろたえてしまった。取材をお願いしたのはこちらのほうだ。なのに、財津はこちらが先に言わないといけないことばを次々と投げかけてくる。

その様子を見ながら、財津のマネージャーが、私が財津と同じ福岡の出身であり、両親が財津の長年のファンだったこともあり、小さな頃からTULIPの曲に慣れ親しんでき

たと紹介してくれた。するとうれしそうに、それでいてとても恐縮した様子でふたたび財津が口を開いた。

「光荣です」

ここでも感謝のことば。なんて腰の低い人なんだろう——。

それが財津の第一印象だった。それまで私は財津に物静かで気難しい人というイメージを抱いていた。過去のインタビュー映像などを見ると、斜に構えているというか、本心をなかなか見せない人という印象があったからだ。財津をよく知る人からも、「あまり人に心を開くタイプではない」と聞かされていた。しかし、実際に会う財津はそうしたイメージとは真逆の人だった。

音合わせの時間となり、財津はスタッフの待つりハーサルスタジオへと向かった。途中、マイクスタンドや機材などに足をひっかけては、恥ずかしそうにこちらを振り返る。ようやく自分の定位置となるキーボード前にたどりつくと、おもむろに財津がスタッフにこう話しかけた。

「今日は何からだっけ？」

その問いに舞台監督が答える。

「NHKさんの取材も入っているので、『心の旅』からいきましょうか」

そのことばにうなずきながら、財津が楽器のチューニングに取りかかった。といってもチューニングに没頭というわけではない。メンバーの宮城伸一郎みやぎしんいちろうのベースギターを取りあげては「もっと軽いヤツを使ったほうがいいんじゃない？」とからかってみたり、やはりメンバーの姫野達也ひめのたつやと何やら楽しげにおしゃべりしてみたりと、財津なりにスタジオ内の緊張感をほぐそうとしているようだった。

やがて、財津のかけ声とともに名曲「心の旅」の演奏が始まった。それも一度ならず、三度も。財津の歌声はパワフルで、はた目からはとても一年前まで大腸がんと闘っていたアーティストとは思えない。

ただ、その表情はどこか自信なさげだった。その様子を見て思わず、「仕上がりはいかがですか？」と声をかけてしまった。

「予定どおりに順調にきているとは思うんですけど、個人的にはどうかな。順調にきてい



リハーサル中の財津。2018年8月

ると思うんですけど、個人的にはまだまだという不安もありますね」

似たような言い回しを二度も繰り返した後で、それでもまだ説明が足りないと感じたのか、財津はさらにこう付け加えた。

「闘病生活を一年ほどしてやっと戻ってきたのスタートなんで、始めてみないとちょっとわかんないかな。気持ち的にはいつもの感じでやろうとは思っているんですけど、やっぱり肩に力が入っているのかもしれないですね」

芸能人やアーティストと呼ばれる人々は基本的にポジティブなことしか口にしない。とくに一对一のインタビューともなれば、メディア側は何とか取材対象の本音を引き出そうと、通常の会見では聞けな

いようなネガティブな質問もぶつける。そんなメディアへの防御的な意味もあって、前向きで無難な受け答えになってしまふのがふつうだ。

ところが、財津は「仕上がりは？」という問いに、「肩に力が入っているのかも」と、さらりと自分の弱さをさらけ出してしまふ。何だか、とても新鮮だった。

万事、謙虚で控え目な受け答えが続くなかで、財津がひとつだけ思わせぶりの物言いをした話題があった。復活コンサートのオープニング曲についてだった。ライブの雰囲気は第一曲目で決まる。そのため、アーティストたちは最初の曲を何にしようかと、あれこれと思い悩む。しかし、財津はセットリスト（コンサートで演奏する曲の一覧表）の一番目は「すでに決めてある」と言うのだ。

その曲名が知りたかった。しかし、財津はいたずらっぽくニコニコと笑うだけで、なかなか曲名を明かさそうとしない。仕方ないのでこう質問してみた。

——その曲をオープニング曲に選んだ理由だけでも聞かせてください。

「ものすごく久しぶりにその曲をやってみたくなりました。タイトルからして、一曲目にするといいなと瞬時に思ってしまった。コンサートの演奏曲を決めるにあたって、最初

に決めたのがこの曲をオープニングで歌おうということでした。タイトルはネタバレになっちゃうから、いまは言いません」

——ががが癒えてコンサートを再開する。そんな財津さんのいまの心情とマッチするとうことでしょいか？

「そうかもしれません。元気で楽しい曲というだけでなく、何といってもコーラスワークがふんだんに入っていて、聴衆がライブ会場でバンドをふんだんに感じられる曲なんです」

そう語る財津の表情はどこかうれしそうだった。久しぶりのコンサートに不安を抱えながらも、会場を訪れるファンに楽しんでもらいたいという財津の思いがひしひしと伝わってくる。これからの取材が楽しみだった。

原点の場所

取材中に財津が私たちを案内してくれた、彼にとっての原点ともいえる場所がある。福岡市中心部の天神駅から徒歩一〇分ほどのところにある須崎公園だ。アマチュア時代、財